就学前期のエフォートフル・コントロールの発達

養育者の注意逸らしと子どもの遊びに焦点を当てて

○一木恒佑¹・水野里恵²

(¹中京大学大学院心理学研究科・²中京大学)

キーワード：エフォートフル・コントロール、注意逸らし、遊び

Development of children's effortful control in preschoolers: Focusing on distracting and play

Kousuke IKKI¹, Rie MIZUNO²

(¹Graduate School of Chukyo University, ²Chukyo University)

Key Words: effortful control, distracting, play

目 的

エフォートフル・コントロール (Effortful Control: 以降 EC とする) は、表に出ていない反応を遂行するために表に出ている反応を抑制したり、計画を立てたり、間違いを検出することにおける気質的個人差である。その神経基盤 (前頭連合野) の組織化に伴い、就学前期に EC は劇的な発達を遂げるが、環境の影響を受けながら柔軟に発達する可能性が示されている。本研究では、養育者が注意を逸らして子どもをなだめること、子どもの遊び内容の2つが、ECの発達に対して促進的に寄与すると仮説を立てた。注意逸らしや遊び場面には、子どもの注意機能を絡めた文脈が織り込まれており、それらを通して、ECの発達が促進すると考えられたためである。

方 法

対象者 A市内に住む第一子500名に計5回の質問紙調査を実施した。質問紙は、気質測定項目と養育環境調査項目から構成された。全てのデータが揃った対象者は63名だった。本研究では第3回から第5回のデータを分析対象とした。
EC 第3回から第5回調査時点において、CBQを翻訳したもののから、ECの下位尺度であるAttentional Focusing, Attentional Shifting, Inhibitory Control, Perceptual Sensitivity, Low-intensity Pleasureの5次元を用いた。
注意逸らし 第3回調査時点では、ぐずり4場面で「注意を逸らして対処する」かどうかを4件法で尋ねた。第4回・第5回調査時点では、ぐずり15場面で「気を静める」、「放っておく」、「原因から立ち去る」、「注意を逸らす」の対処法について、普段よく行っているものから順位付けを求めた。
遊び 第4回・第5回調査時点で、身体を使う遊び (4項目)、ワーキングメモリを使う遊び (4項目)、音楽遊び (3項目)、物語り遊び (2項目) の頻度を5件法で尋ねた。

結 果

EC得点の分析：平均値の検討とT得点の算出 CBQの気質尺度得点 (AF, AS, IC, PS, LP) の加算平均値をEC得点として算出した。調査時点内で得点に変動があるかを調べるため、反復測定分散分析を行った結果、被験者内効果は有意でなかった ($F(1, 62) = .07, ns$)。また、調査時点間のEC得点に中程度の正の相関が見られた ($r_s > .69, p_s < .01$)。第3回調査時点のEC得点の平均値と標準偏差を用いて、各回のEC得点についてT得点を算出した。
注意逸らしの分析：尺度得点の算出 第3回調査時点では、ぐずり4場面の素点の加算平均値を尺度得点とした。第4回・

第5回調査時点では、順位を逆転した後、加算平均値を尺度得点として算出した。

遊びの分析：尺度得点の算出 各遊びの頻度を尋ねた項目の加算平均値を各遊びの尺度得点として算出した。どちらの調査時点でもほとんどの尺度得点間に正の相関関係が見られた (第4回 $r_s = .08 - .28$, 第5回 $r_s = .13 - .60$)。そこで、加算平均値を遊び尺度得点とした。

EC得点と注意逸らし・遊び尺度得点の交差的時間差相関分析：変数間の因果関係的な時間順序を調べるため、交差的時間差相関分析を行った (Figure 1)。

Figure 2. 交差的時間差相関分析

T得点の変動得点の分析：回帰分析 第3回と第4回、第4回と第5回のT得点の差を求めて変動得点 (T3-4_変動得点, T4-5_変動得点) を算出した。T3-4_変動得点では第3回調査時点の注意逸らし尺度得点を、T4-5_変動得点では第4回調査時点の注意逸らし・遊び尺度得点を説明変数として、回帰分析を実施した。T3-4_変動得点での決定係数は.17 ($F(1, 65) = 13.2, p < .01$) であり、注意逸らし尺度得点の係数が有意だった ($\beta = .41, p < .01$)。T4-5_変動得点での決定係数は.02 ($F(2, 58) = .53, ns$) であり、注意逸らし・遊び尺度得点の係数はともに有意でなかった ($\beta = -.03, ns$; $\beta = -.13, ns$)。

考 察

調査期間において、ECの平均値に差は見られず、集団としての安定性が確認できた。交差的時間差相関分析から、第3回調査時点の注意逸らしが、次点のECに影響を与えることが示唆された。遊びはECと横断的・時差的に関連しており、安定的な関係にあることがわかった。変動得点に対する回帰分析から、第3回調査時点の注意逸らしが、次点までのECの変動を説明でき、注意逸らしがECの発達に促進的な影響を与える可能性が示唆された。

本研究は、科学研究費補助金 (基盤研究 (B) 研究課題番号 21330156, 研究代表者: 水野里恵; 基盤研究 (C) 課題番号 26380909, 研究代表者: 水野里恵) の助成を受けた。

Table 1. 各尺度得点の平均値と標準偏差

	T3_EC	T4_EC	T5_EC	T3_注意	T4_注意	T5_注意	T4_遊び	T5_遊び
Mean	4.56	4.55	4.62	2.16	1.64	1.56	3.62	3.66
SD	0.45	0.51	0.59	0.55	0.42	0.52	0.52	0.56